

冊子シリーズ「旭の里山・生きもの写真集」作業事業

旭の自然を守る会

岡山県

今回助成をいただいた活動は、「冊子シリーズ『旭の里山・生きもの写真集』作成事業」です。申請書記載通り 4 種類の冊子を作成することができました。各 1 部を成果物として提出させていただきます。また、(1)冊子の配布先、(2)いただいた声の一部、(3)今後の予定をご報告いたします。

(1) 冊子の配布先

- ・岡山県自然保護センター ・倉敷市立自然史博物館
- ・美咲町役場旭支所 ・美咲町立旭図書館 ・美咲町立柵原図書館
- ・美咲町立旭小学校 ・美咲町立旭中学校
- ・みち停あさひ（美咲町） ・道の駅久米の里（津山市）
- ・美咲町埴和（はが）自治会、西埴和自治会の希望者
- ・自然保護などの活動をされている個人の方

(2) いただいた声の一部

・今回作成の写真集は地域の記録としての財産としてぜひ残して頂きたいと思います。続いて計画中の「夏の花」と「秋の花」の仕上がりを楽しみにしております。「美しい蝶たち」は昆虫の専門家である石原さんならではの目から見た素晴らしい内容であり、花の編が終了したら、続いて昆虫編を発刊して戴きたいですね。（岡山県森林インストラクター会 M 氏）

・かなり苦勞されたのではないかと推察します。私もいつか作ってみたいと、この写真集を見ながら、刺激を受けました。（岡山県新見市で自然保護団体主催 O 氏）

・地区の自然環境保全に役立つと良いですね。小中高の図書館等に是非置いていただきたいです。少しでも自然環境情報に触れる機会を増やすことは重要と常日頃から考えています。商売柄、障害がある児童生徒にとって自然環境に目を向けることの機会は相当に少ないことを見てきているものにとって、意図的に自然環境に目を向けさせる活動も大切でした。（重度の方にとっては四季折々の風に触れて冷たさ、暑さを感じることも大切なのです）今後も地道な活動ですが、アイデアを加えながら続けて発信されることを祈っております。（神奈川県支援学校で長年勤務された N 氏）

・蝶はじっとしてくれているものばかりではないので、写真集で紹介された蝶は自分の目ではっきり見たと言えないものが数多くありました。例えばアオスジアゲハ。里山の代表的な蝶でしょうけれど、見る目がないのか、見ようとしていないのか、そもそも見る場所が違うのか。花はだいたい知っている気はしますが、ちゃんと頭に入っているものはそう多くありません。蝶にしても花にしても、山の仕事をされていてよく見るものだけが馴染み

深く、あとはやっぱりあまり知らないと言った方が正しいですね。送っていただいた写真集についての感想を言えば、本当は蝶と花で分けることをせず、写真だけの羅列にすることもせず、混ぜて所どころ解説も入れて、繋がりや関連性のわかるものになっていれば、私としてはもっと楽しめたと思います。その方が「リーフレット発刊について」の中で石原さんが込めた想いがよりダイレクトに伝わるものになったのではないのでしょうか？しかし、それを実現するためには小冊子では相当に難しいことかもしれません。資金の目処が立てば来年以降の作成もあるとのことですから、最後にまとめの総括の冊子を是非作っていただきたいと思います。想いが最後の文章からではなく、冊子の1ページ目から伝わってくるものを。生意気言いましたが、お許してください。（林業家 F 氏）

・1、2冊目は写真だけだったものが、今回は解説が入ったり、ちょっとした読みものが入ったりしたことで、面白さがぐっと増した気がします。今後とも続けていただいて、さらなる発展を期待します。（林業家 F 氏）

・一口解説はありがたい。写真の花を記憶するのにとても役立ちます。ヨメナとノコンギクの違いなど。「里山雑記帳」、石原様の気持ちや考え方が伝わってきます。次回が楽しみです。（蝶研究者 T 氏）

(3) 今後の予定

今回タカラ・ハーモニストファンด์のご協力を得て4冊を発刊することができました。見ていただいた多くの方々から温かい激励と感想、ご意見をいただきました。今年度は、岡山県の環境団体から助成をいただけることになりましたので、冊子シリーズの続編として、この地域のトンボ、野鳥、両生類をまとめる予定です。今回いただいた声を生かして取り組みたいと思っています。具体的には今年度予定の生物群に関しては、当地で今までに確認された生物種のリストを添える予定です。それによって資料としての価値が増すのではないかと考えます。また、次年度以降の目標として、指摘いただいたような、生きもの同士の繋がりや関連性が伝わるようなものを模索したいと思っています。企業や団体から助成をいただく以上、社会に対して僅かであっても貢献できるものを作るという責任感を忘れず、より良いものを目指します。

昨今、災害の多発などで人々の不安感が増しているためでしょうか、「気候変動」「再生可能エネルギー」「SDGs」などの言葉を新聞紙面で見ない日はありません。反面、「生物多様性」や「里山」という言葉が最近少し色あせてきている印象があります。もちろんそれらの言葉はすべて関連性をもつわけですが、生態系を形成する多くの生きものたちの活動の上に人間の生存も成り立っている、ということ子どもたちや若い世代が理屈ではなく、肌感覚で知ることがますます重要になってくると思います。コロナ禍で困難な状況はありますが、地元の環境保全や生物調査の活動を「旭の自然を守る会」のメンバーとともに継続し、また発信を続けたいと考えています。

以上で活動成果報告とさせていただきます。（文責：石原隆志）

旭の里山・生きもの写真集

(岡山県美咲町旭地域)

その1 美しい蝶たち



(1) アゲハの仲間



アオスジアゲハ (2010.06.02)



アゲハ (2019.06.18)



カラスアゲハ (2012.05.28)



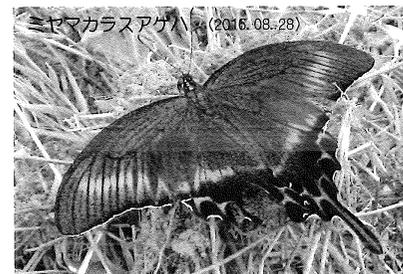
キアゲハ (2019.06.22)



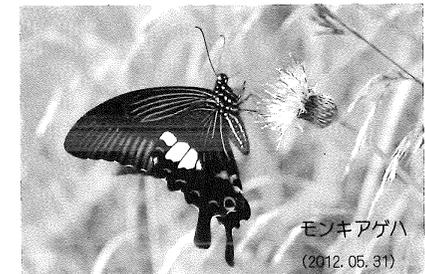
クロアゲハ (2014.08.14)



ジャコウアゲハ (2020.06.05)



ミヤマカラスアゲハ (2016.08.28)



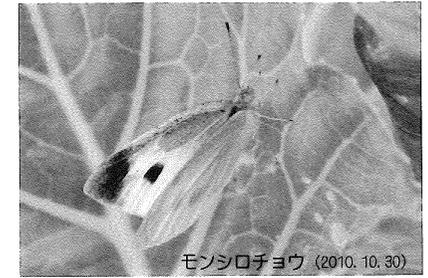
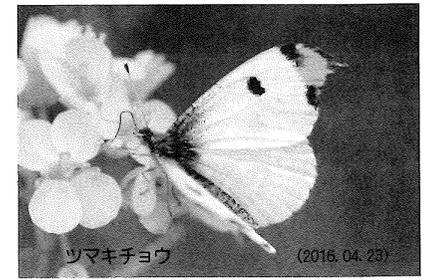
モンキアゲハ (2012.05.31)

(2) シジミチョウの仲間



※ウラナミアカシジミは岡山県版レッドデータブック 2020 で「準絶滅危惧」とされています。

(3) シロチョウの仲間



※スジボソヤマキチョウは岡山県版レッドデータブック 2020 で「準絶滅危惧」とされています。

(4) セセリチョウの仲間



(5) タテハチョウの仲間



アサマイチモンジ (2010. 05. 29)



ホシミスジ (2019. 06. 09)



オオムラサキ
(2018. 06. 25)



ゴマダラチョウ (2011. 08. 04)



コムラサキ
(2010. 07. 31)



ゴコノマチョウ (2011. 11. 16)



ジャノメチョウ (2019. 07. 05)



ヒカガチョウ (2011. 08. 22)

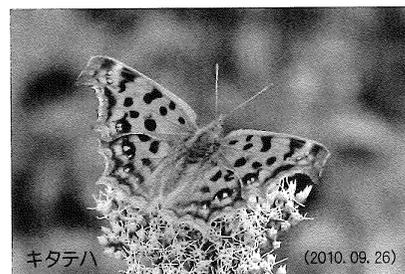
(5) タテハチョウの仲間 (続き)



アカタケ (2013. 10. 27)



ウラギンヒョウモン (2015. 06. 17)



キタテハ (2010. 09. 26)



クモヒョウモン (2011. 06. 13)



ツマグロヒョウモン (2010. 10. 16)



ヒオトシチョウ (2012. 06. 13)



メスグロヒョウモン (2012. 10. 08)



テングチョウ (2014. 06. 02)

※オオムラサキは岡山県版レッドデータブック 2020 で「準絶滅危惧」とされています。

リーフレット発刊について

遠い昔から、人々が食料やエネルギーを手に入れるために自然に手を加えながら調和のとれた持続可能な環境を作り上げてきた、そんな場所が里山です。そこには水田、畑、水路、ため池、雑木林、人家など多様な環境が存在し、様々な生活様式をもつ多くの動植物に生育場所や繁殖場所、食べ物などを提供してきました。そのために里山は「生物多様性の宝庫」と言われます。しかし、近年人々の生活様式の変化とともに里山の様子も大きく変わりました。水田の乾田化や耕作放棄、水路のコンクリート化、雑木林の放置などにより以前の里山環境はもはや消滅寸前といってもいいかもしれません。それに伴って多くの動植物が数を減らし、絶滅寸前の状況に追い詰められています。身近だった生きものが、最近全く姿を見ないということがよくあると思います。昔の暮らしに戻ることはできませんが、貴重な生きものがかろうじて命を繋いでいる場所だけでも保全して未来に引き継ぐことはできないでしょうか。私たちはここ何年か多くの方々の協力を得て試行錯誤をしながら、里山の環境と生きものの保全に取り組んできました。少しずつですが成果が出てきています。そのような「里山生態系保護フィールド」とでもいうような場所が小規模であっても各地域に存在すれば、貴重な生きものたちを守ることができ、学術的な価値も大きいと考えます。また未来を担う子どもたちの情操涵養や人々の心身の健康にも役立つのではないのでしょうか。里山の生きものたちの姿をできる限り多くの人々に紹介し、そのような生きものたちが身近にいることの価値を感じていただきたいとの思いで、生きものたちの写真を集めたリーフレットシリーズの製作を企画しました。掲載の写真は美咲町旭地域で撮影したものに限定しています（撮影場所の詳細は非公開とさせていただきます）。なお、紙面の都合で紹介できる生きもの数はごく一部に限られていますし、また内容的にも不十分な点が多いと思います。どうぞご容赦ください。見ていただいた感想などをお寄せいただけるとありがたいです。（石原隆志）

旭の里山・生きもの写真集 その1 美しい蝶たち

2020年7月発行

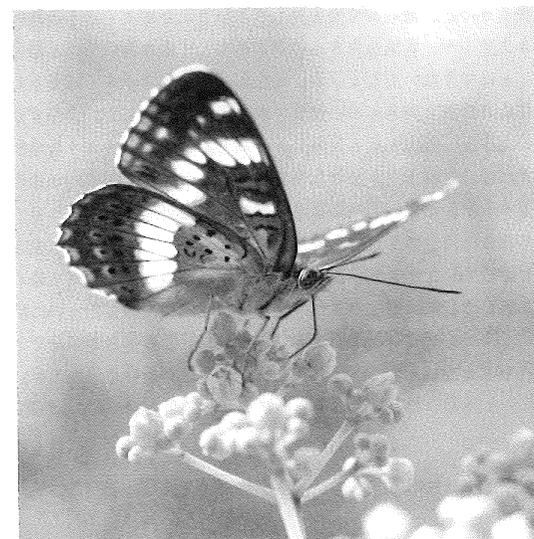
発行責任者：石原隆志（岡山県自然保護推進員）、石原八束（同）

連絡先：hoonoki@mx32.tiki.ne.jp HP: <http://hoonoki-koubou.jp> 「岡山中北自然観察誌」

協力：岡山県自然保護センター、旭の自然を守る会

表紙：スジボソヤマキチョウ（2017.09.29撮影） 裏表紙：アサマイチモンジ（2020.05.27撮影）

※このリーフレットは、公益信託タカラ・ハーモニストファンド令和2年度活動助成を受けて作成しました。



旭の里山・生きもの写真集

(岡山県美咲町旭地域)

その2 春の花



シヨウジョウバカマ(シュロソウ科) 2018.04.12



チゴユリ(イヌサフラン科) 2016.04.23



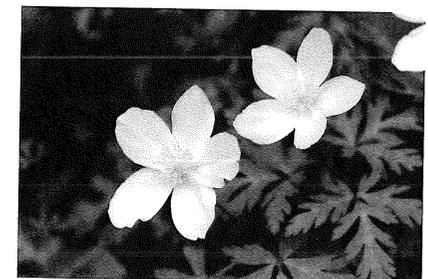
シュンラン(ラン科) 2013.03.19



カサゲ(カヤツリグサ科) 2017.04.23



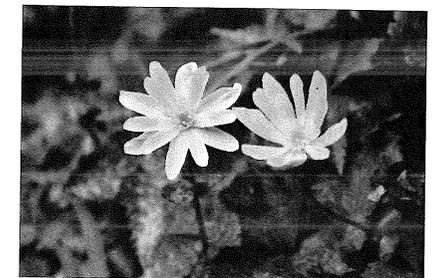
トキワイカリソウ(メギ科) 2018.04.08



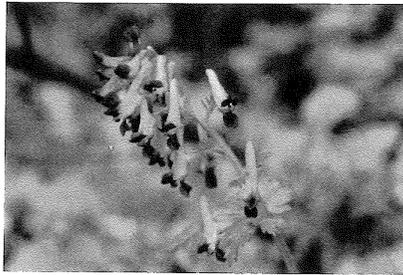
イチリンソウ(キンポウゲ科) 2017.04.25



ウマノアシガタ(キンポウゲ科) 2015.04.25



ユキワリイチゲ(キンポウゲ科) 2015.03.22



ムラサキケマン(ケシ科) 2017.04.25



アリアケスミレ(スミレ科) 2017.04.25



オドリコソウ(シソ科) 2015.04.25



キランソウ[ジゴクノカマノフタ](シソ科) 2019.04.12



タチツボスミレ(スミレ科) 2013.05.07



シハイスミレ(スミレ科) 2013.04.08



ホトケノザ(シソ科) 2013.03.29



サギゴケ[ムラサキサギゴケ](ハエドクソウ科) 2017.04.06



ニオイタチツボスミレ(スミレ科) 2014.04.10



ヒメハギ(ヒメハギ科) 2013.05.02



カンサイタンポポ(キク科) 2008.04.20



キビシロタンポポ(キク科) 2018.04.18



ミツバツチグリ(バラ科) 2019.05.01



ヤマルリソウ(ムラサキ科) 2019.04.08



コオニタビラコ(キク科) 2016.04.08



ハハコグサ[ホオコグサ](キク科) 2015.04.25

※「春の七草」のホトケノザはコオニタビラコ、ゴギョウはハハコグサのことです。

リーフレット発刊について

遠い昔から、人々が食料やエネルギーを手に入れるために自然に手を加えながら調和のとれた持続可能な環境を作り上げてきた、そんな場所が里山です。そこには水田、畑、水路、ため池、雑木林、人家など多様な環境が存在し、様々な生活様式をもつ多くの動植物に生育場所や繁殖場所、食べ物などを提供してきました。そのために里山は「生物多様性の宝庫」と言われます。しかし、近年人々の生活様式の変化とともに里山の様子も大きく変わりました。水田の乾田化や耕作放棄、水路のコンクリート化、雑木林の放置などにより以前の里山環境はもはや消滅寸前と言ってもいいかもしれません。それに伴って多くの動植物が数を減らし、絶滅寸前の状況に追い詰められています。身近だった生きものが、最近全く姿を見ないということがよくあると思います。昔の暮らしに戻ることはできませんが、貴重な生きものがかろうじて命を繋いでいる場所だけでも保全して未来に引き継ぐことはできないでしょうか。私たちはここ何年か多くの方々との協力を得て試行錯誤をしながら、里山の環境と生きものの保全に取り組んできました。少しずつですが成果が出てきています。そのような「里山生態系保護フィールド」とでもいうような場所が小規模であっても各地域に存在すれば、貴重な生きものたちを守ることができ、学術的な価値も大きいと考えます。また未来を担う子どもたちの情操涵養や人々の心身の健康にも役立つのではないのでしょうか。里山の生きものたちの姿をできる限り多くの人々に紹介し、そのような生きものたちが身近に感じることを感じていただきたいとの思いで、生きものたちの写真を集めたリーフレットシリーズの製作を企画しました。掲載の写真は美咲町旭地域で撮影したものに限定しています（撮影場所の詳細は非公開とさせていただきます）。なお、紙面の都合で紹介できる生きもの数はごく一部に限られていますし、また内容的にも不十分な点が多いと思います。どうぞご容赦ください。見ていただいた感想などをお寄せいただけるとありがたいです。（石原隆志）

旭の里山・生きもの写真集 その2 春の花

2020年7月発行

発行責任者：石原隆志（岡山県自然保護推進員）、石原八束（同）

連絡先：hoonoki@mx32.tiki.ne.jp HP: <http://hoonoki-koubou.jp> 「岡山中北自然観察誌」

協力：岡山県自然保護センター、旭の自然を守る会

表紙写真：スマレ（スマレ科）2019.05.01撮影

裏表紙写真：ゲンゲ[レンゲソウ]（マメ科）2014.05.02撮影

※このリーフレットは、公益信託タカラ・ハーモニストファンド令和2年度活動助成を受けて作成しました。

※植物の和名と分類は「山溪ハンディ図鑑1 野に咲く花」に従いました。



旭の里山・生きもの写真集

(岡山県美咲町旭地域)

その3 夏の花



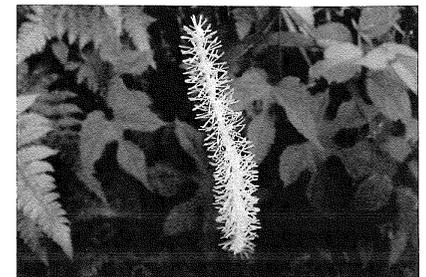
1.ドクダミ(ドクダミ科) 2014.06.11



2.フタリシズカ(センリョウ科) 2017.05.26



3.ミズオオバコ(トチカガミ科) 2015.09.04



4.シライソウ(シュロソウ科) 2020.05.29



5.コオニユリ(ユリ科) 2020.07.19



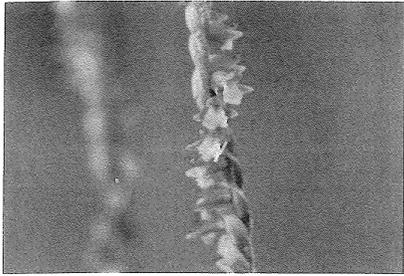
6.ササユリ(ユリ科) 2012.06.13



7.キンラン(ラン科) 2014.05.08



8.ギンラン(ラン科) 2014.05.19



9.ネジバナ(ラン科) 2020.07.09



10.ヤブカンゾウ(ワスレグサ科) 2011.07.08



17.ユキノシタ(ユキノシタ科) 2016.05.22



18.ミソハギ(ミソハギ科) 2018.08.30



11.ノカンゾウ(ワスレグサ科) 2015.07.23



12.キツネノカミソリ(ヒガンバナ科) 2018.08.16



19.オトギリソウ(オトギリソウ科) 2020.08.10



20.ミヤコグサ(マメ科) 2019.05.24



13.ツルクサ(ツルクサ科) 2015.09.04



14.センニンソウ(キンポウゲ科) 2020.08.05



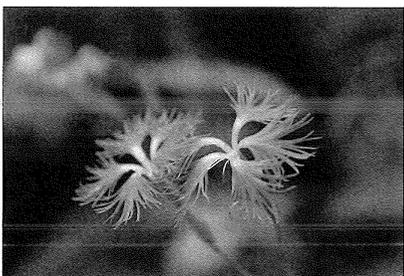
21.コマツナギ(マメ科) 2015.07.03



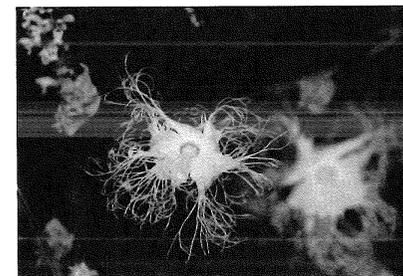
22.ノアズキ(マメ科) 2014.09.05



15.ハンショウヅル(キンポウゲ科) 2017.05.29



16.カワラナデシコ(ナデシコ科) 2020.07.17



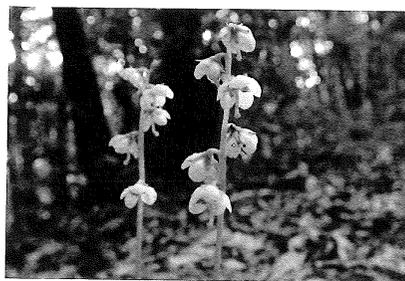
23.キカラスウリ(ウリ科) 2015.08.05



24.オカトラノオ(サクランソウ科) 2020.06.28



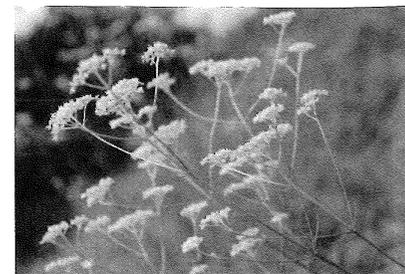
25.ヌマトランオ(サクラソウ科) 2013.07.21



26.イチヤクソウ(ツツジ科) 2015.06.17



33.ハナウド(セリ科) 2014.06.05



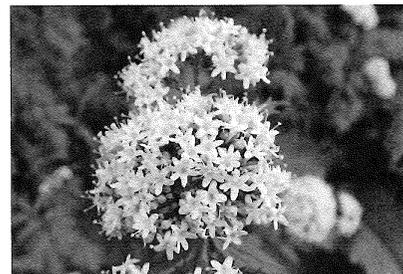
34.オミナエシ(スイカズラ科) 2020.08.12



27.ギンリョウソウ(ツツジ科) 2017.05.09



28.ヒルガオ(ヒルガオ科) 2015.06.23



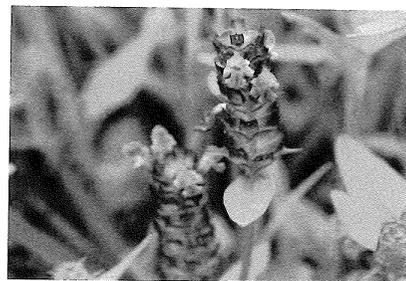
35.カノコソウ(スイカズラ科) 2020.05.14



36.キキョウ(キキョウ科) 2020.07.30



29.イワタバコ(イワタバコ科) 2020.08.05



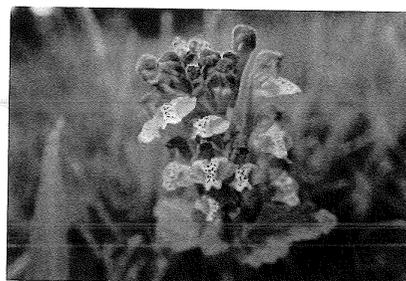
30.ウツボグサ(シン科) 2013.07.08



37.ホタルブクロ(キキョウ科) 2020.06.12



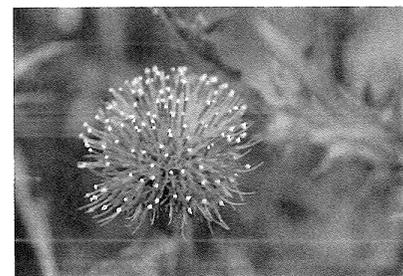
38.ミンカクシ(キキョウ科) 2014.09.01



31.タツナミソウ(シン科) 2020.05.21



32.クルマバナ(シン科) 2014.07.30



39.ノアザミ(キク科) 2016.05.28



40.ニガナ(キク科) 2015.05.17

「夏の花」 一口解説

- 1.ドクダミ[葎草]: 半陰地に群生して独特の臭気。おなじみだけどもとても変わった花。上部の薄黄色の部分にめしべとおしべだけの小さな花が集まっていて、花弁(はなびら)も萼(がく)もない。白い4枚の花弁のような部分は苞葉片(そうほうへん)と呼ばれるもの。10の葉効があるとされ、十葉(じゅうやく)の名も。
- 2.フタリスズカ[二人静]: 白いツブツブはおしべの一部で、めしべを包むような構造。花弁(はなびら)も萼(がく)もない。花の穂が2本のことが多いのでヒトリシズカという植物に対してフタリスズカ。
- 3.ミズオオバコ[水大葉子]: オオバコに似た茶色っぽい葉が水中にある(写真左方緑色はコナギの葉)。休耕田に水を張っていたら自然発生。土に長年埋まったままの種子(埋土種子)から芽生えたよう。県の絶滅危惧種。
- 4.シライソウ[白糸草]: 山地の林内などに生えるが少ない。株元に葉があり、花がつく軸(高さ15~40cm)にも細い葉がつく。花の軸は上部に多数の白い花がありブラシ状に見える。ユニークな花で、細く突き出した部分は花びらや萼(がく)に相当するもの。その付け根付近にごく短いおしべやめしべがある。
- 5.コオニユリ[小鬼百合]: 山地よりのやや湿った法面などに生える。オニユリと異なり葉脈に珠芽(むかご)はできない。以前は普通に見られたのに最近激減している。
- 6.ササユリ[笹百合]: 葉がササの葉に似ている。これも激減。イノシシに掘られ、人に掘られ…。発芽後花が咲くようになるまでに数年を要する。しかし少し環境整備してやれば意外にたくましい。
- 7.キンラン[金蘭]: 高さ30~70cm。5~6月に明るい黄色の花をつける。最近激減しており、県の絶滅危惧種。菌を介して間接的に樹木の根から養分をもらっているとされる。したがって見つけて持ち帰っても育てることは不可能。見つけた幸運をその場で楽しみましょう。
- 8.ギンラン[銀蘭]: 高さ10~25cm。キンラン同様に栄養を樹木・菌に依存しているという。キンランよりも稀で県の絶滅危惧種。この写真の撮影地には現在ソーラーパネルが並ぶ。
- 9.ネジバナ[振花]: 別名モジズリ[振摺]。ネジレバナ、ネジリバナ、ネジレソウと呼ばれることも。右巻き・左巻き、まれに白花もある。振摺(もじずり)はかつて奥羽地方で生産された、ねじれ模様の絹織物。
- 10.ヤバカンゾウ[菽萱草]: おしべ・めしべが花弁状に変化。道端などに普通で若葉は食用になる。
- 11.ノカンゾウ[野萱草]: 湿った場所に生えるが少ない。葉が細い。
- 12.キツネノカミソリ[狐の剃刀]: 葉が春に出て夏に枯れる。その後花の茎が伸びてくる。面白い生態の植物。
- 13.ツククサ[露草]: 別名ボウシバナ[帽子花]、ツククサ[月草・着草]、アオバナ[青花]など。畑では厄介な草であるが青い花弁の花は美しい。黄色いおしべはよく見ると3種類の形がある。
- 14.センニンソウ[仙人掌]: 日当たりのよい所に生える木質のつる植物。茎や葉の汁でかぶれることがある。名は花後の実が生えた白く長い毛を仙人のヒゲに例えたとか。
- 15.ハンショウヅル[半鐘蔓]: 林内や林縁に生える木質のつる植物。少ない。花の形をうまく表した名だけど、半鐘という言葉が今や半死半生? 赤紫色の部分は萼(がく)で花弁はない。
- 16.カワラナデシコ[河原撫子]: 日当たりのよい草地などに生える。秋の七草のひとつだが花は夏が盛り。局地的にしか見ないので保護したい植物。
- 17.ユキノシタ[雪の下]: 湿った岩などに大群落を作る。上3個の花弁は小さくて下2個は長い。
- 18.ミノハギ[稷萩]: 湿地に生えて群生する。かつては仏前に供える花で「盆花(ぼんばな)」と呼ばれ、半栽培のような状態だったらしい。今はあまり見かけない。秋には葉が紅葉してこれも美しい。
- 19.オトギリソウ[弟切草]: 日当たりの良い場所に生え、高さ30~60cm。多年草なので毎年同じ場所で見られる。名はこの草の葉効をめぐって兄が弟を切ったという物騒な伝説から。
- 20.ミヤコグサ[都草]: 別名エボシグサ。日当たりの良い場所に地をほうように広がる。刈られてしまうことが多いが、希少な蝶シルビアシジミ(当地では確認していないが)の食草なので保護したい。
- 21.コマツナギ[駒繫ぎ]: 日当たりの良い斜面やあぜなどに多い。高さ40~80cm位。茎が駒(馬)を繫げるほど丈夫ということから。

- 22.ノアズキ[野小豆]: 別名ヒメクズ。中央の花弁がクルリとねじれた独特の形。ヤブツルアズキという植物がよく似ているが、ノアズキの豆の莢(さや)は扁平でヤブツルアズキは円筒形。
- 23.キカラスウリ[黄烏瓜]: 縁が細かく裂けた独特の花。夜に開き朝にはしぼむ。雄株と雌株がある。写真は雄株に咲いた雄花。実が黄色い。赤い実のカラスウリはもう少し山地に生える。
- 24.オカトラノオ[岡虎の尾]: 日当たりの良い場所に。花が下から咲き上がり上部は垂れ下がる。
- 25.ヌマトラノオ[沼虎の尾]: 湿地に群生する。前種のように垂れることはない。
- 26.イチヤクソウ[一葉草]: 以前はイチヤクソウ科とされていたが最新の分類体系でツツジ科に。林内の薄暗いところに生える。薬草とされる。少ない。
- 27.ギンリョウソウ[銀竜草]: これも以前はイチヤクソウ科とされていた。林内の落ち葉が積もったような場所に生える。葉緑体がなく光合成能力を持たない。樹木が作った有機物を菌類経由で得て栄養としているという。
- 28.ヒルガオ[昼顔]: 昼に咲くから昼顔。つる性の多年草で毎年同じ場所に生える。
- 29.イワタバコ[岩煙草]: 水が滴るような日陰の岩壁に生え葉がタバコの葉に似ることから。群落を作るが局地的。生育地の環境を守る必要がある。園芸種のセントポーリアはこの仲間。
- 30.ウツボグサ[藪草]: 花が集まった部分を藪(うっぱ・矢を入れる筒)に見立てた名。
- 31.タツナミノウ[立浪草]: わかりやすい名。日当たりの良い草地で小さいけれどよく目立つ。
- 32.クルマバナ[車花]: これもわかりやすい名。薄紅色の群生は美しい。
- 33.ハナウド[花独活]: 小花の集団が盤状に開いて青空に映える。岡山県では若葉はウドナと呼ばれ食用に。
- 34.オミナエシ[女郎花]: 秋の七草のひとつだが8月頃が盛り。花までに刈られてしまうことも多い。若い株も特徴があってよくわかるので刈らずに残したい。
- 35.カノコソウ[鹿の子草]: 別名ハルオミナエシ。やや湿った道路際などで見られる。
- 36.キキョウ[桔梗]: 秋の七草のひとつだが7~8月が盛り。これも減少しているので保護したい植物。
- 37.ホタルブクロ[蛭袋]: この辺りでは白花が多い。まれに淡紅紫色。名は、子どもが蛭を入れて遊んだからという説と、火垂(ほたる、提灯のこ)に似ているからという説がある。
- 38.シヅカクサ[溝隠]: 別名アゼムシロ。水田周辺の湿った場所に広がるのでどちらの名もわかりやすい。
- 39.ノアザミ[野薔]: 5月~8月にかけて咲く。刈られてしまうことも多いが、アゲハチョウやタテハチョウの仲間が好む花なので、邪魔にならない場所なら刈らずに残してやりたい。
- 40.ニガナ[苦菜]: 初夏に普通。葉や茎を傷つけると苦みのある乳液が出るが食用にもなるので苦菜。

里山雑記帳

(1)里山事始め

将来は里山保全活動をしたと漠然と思っていましたが、たまたま新聞記事で旧旭町の地を知りました。思い描く土地はいろいろあったのですが、現地を見てすぐに「ここ!」と決めました。20年ほど前のことです。この土地がどうして気に入ったのか、今から思えば周りの雑木林と棚田の美しさでしょうか。定住したのは9年前で、その時には美しかった棚田はかなりの部分が耕作放棄地になっていました。そこで、農業経験のない私たちには少々冒険でしたが、休耕田となっている田を1枚お借りしました。元々水が湧く湿地でしたので、水を溜めて「田んぼビオトープ」に。ミズカマキリやタイコウチなどの水生昆虫がすぐに現れました。今はいくつかの休耕田の管理者という立場になり、希少生物保護や景観植物栽培など、環境と景観を保全する棚田を目標として管理させていただいています。田んぼビオトープも4枚になりました。これから、この冊子シリーズに当地の里山の豊かさ、魅力、そして現状など綴っていきたいと思います。(Y)

リーフレットその3発刊にあたって

里山の生きものたちの姿を多くの人々に紹介し、そのような生きものたちが身近にいることの価値を感じていただきたいとの思いで、生きものたちの写真を集めたリーフレットシリーズの製作を行っています。「その1・美しい蝶たち」「その2・春の花」に続いて「その3・夏の花」を発刊します。その1・その2を見ていただいた何人かの方から、写真だけでなく解説的なものもほしい、というご意見をいただきました。今回は短いものですが入れさせていただきます。図鑑や本は参考にしていますが、専門用語などはできるだけ使わないようにしました。また、「里山雑記帳」というコーナーも付け加えました。ちょっとした話題や情報などを入れたいと思います。

夏の里山には野の花が溢れるようです。刈り取られてもすぐに持ち直して遅く生きている植物がある一方で、環境の変化に伴って数を減らし、絶滅の危機に追い込まれているものも少なくありません。生きもの多様性を保全するためには環境の多様性を保全することが不可欠です。生産性とは違う価値観を持つこともまた大切ではないかと思えます。

掲載の写真は岡山県久米郡美咲町旭地域（旧旭町）で撮影したものに限定しています（撮影場所の詳細は非公開とさせていただきます）。紹介できた植物はごく一部に限られていますし、内容的に不十分な点も多いと思います。どうぞご容赦ください。見ていただいた感想などをお寄せいただけるとありがたいです。（石原隆志）

旭の里山・生きもの写真集 その3 夏の花

2020年11月発行

発行責任者：石原隆志（岡山県自然保護推進員）、石原八束（同）

連絡先：hoonoki@mx32.tiki.ne.jp HP: <http://hoonoki-koubou.jp> 「岡山中北自然観察誌」

協力：岡山県自然保護センター、旭の自然を守る会

表紙写真：ササユリ（ユリ科）2013.06.10撮影

裏表紙写真：ミソハギ（ミソハギ科）2018.08.30撮影

※このリーフレットは、公益信託タカラ・ハーモニストファンド令和2年度活動助成を受けて作成しました。

※植物の和名と分類は「山溪ハンディ図鑑1 増補改訂新版・野に咲く花」、「同2 増補改訂新版・山に咲く花」に従いました。



旭の里山・生きもの写真集

(岡山県美咲町旭地域)

その4 秋の花



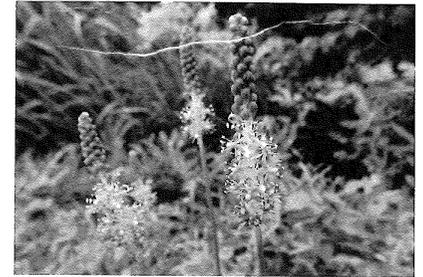
1.オモダカ(オモダカ科) 2020.09.08



2.セトウチホトトギス(ユリ科) 2015.09.18



3.ヒガンバナ(ヒガンバナ科) 2020.09.25



4.ツルボ(キジカクシ科) 2015.09.03



5.ヤブラン(キジカクシ科) 2018.09.13



6.コナギ(ミズアオイ科) 2016.09.14



7.サクラタデ(タデ科) 2013.09.28



8.ミズンバ(タデ科) 2013.09.28



9.ゲンノショウコ(フウロソウ科) 2016.09.14



10.アカバナ(アカバナ科) 2015.09.08



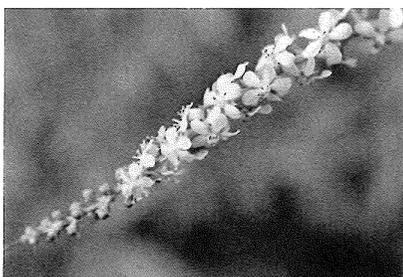
17.ヤクシソウ(キク科) 2015.10.05



18.アキノゲシ(キク科) 2014.09.24



11.クズ(マメ科) 2015.09.04



12.キンミズヒキ(バラ科) 2020.10.13



19.ヨメナ(キク科) 2020.10.13



20.ノコンギク(キク科) 2020.10.07



13. Lindou(Lindou科) 2018.10.25



14.センブリ(Lindou科) 2020.10.19



21.シラヤマギク(キク科) 2020.09.13



22.アキノキリンソウ(キク科) 2016.11.02



15.ナンバンギセル(ハマウツボ科) 2019.09.07



16.ツルニンジン(キキョウ科) 2010.10.16



23.サワヒヨドリ(キク科) 2020.09.25



24.ヒヨドリバナ(キク科) 2013.08.28

「秋の花」 一口解説

- 1.オモダカ[面高]: 別名ハナグワイ。水田や湿地に生えるが最近は減少。上の方に雄花、下の方に雌花がつく。写真は雄花。クワイはオモダカの一品種で地下の球茎部を食べる。
- 2.セウチホトギス[瀬戸内杜鵑草]: 北斜面などやや湿った場所に生える。茎は50cmほどにもなり、崖では垂れ下がる。花全体に紫色の斑点があり、花の中心部には黄色い部分がある。
- 3.ヒガンバナ[彼岸花]: 別名マンジュシャゲ。花の時には葉はなく、花が終わった10月頃から葉が出る。葉は冬も青々として冬枯れのあぜでよく目立つ。他の草にさえぎられることなく太陽光を受け、春になって他の草が伸び始めるころに枯れる。古い時代に中国から渡来したと考えられている。地下の球根(鱗茎)は有毒だが水にさらすと抜けるので、飢饉(ききん)の時には非常食として利用されたという。ふつう種子はできない。
- 4.ツルボ[蔓穂]: 8月後半~9月に淡紅紫色の小さな花を穂状にたくさんつける。名の由来は不明。以前はユリ科とされていた。
- 5.ヤブラン[菫蘭]: ランの仲間ではない。山野の日陰に生える。園芸種も多く、丈夫で手がかからないので庭や公園などにもよく植えられている。これも以前はユリ科とされていた。
- 6.コナギ[小葉葱]: かつては水田にはびこる強害草とされたが除草剤の使用などで減少。しかし田の片隅などで結構見かける。希少種ミズアオイと近い植物。
- 7.サクラタデ[桜蓼]: 名を付けよと言われたら誰でもこう名付けるだろう。高さ0.5~1m位で大きな群落になると見事。昔は「タデ」というとこれのことだったと言う地元のお年寄りもいる。しかし最近は激減しているようで、岡山県では準絶滅危惧種。
- 8.ミノソバ[溝蕎麦]: 別名ウシノヒタイ[牛の額]。葉の形が牛の顔を思わせることから。湿った場所に群生する。花は美しいがあまりにも多いので珍重されることはない。
- 9.ゲンノショウコ[現の証拠]: 別名ミコシグサ[神輿草]。下痢止めの民間薬として有名で、よく効くことから「現の証拠」の名がついたというのはよく知られた話。別名は種子を散らした後のカラが巻き上がってみこしの屋根のような形になるからで、一度見ると納得。赤紫色の花もあるがこの地では白が多い。
- 10.アカバナ[赤葉菜、赤花]: 秋に葉が紅葉し、春は食べられるので赤葉菜となったという。確かに花はピンク色で赤ではない。花の時期は7月~9月で、「夏の花」の方がふさわしいかもしれない。
- 11.クス[葛]: 秋の七草のひとつ。根のでんぷんを精製したものが葛粉(くずこ)で食用に。大株の根の皮を除いて乾燥させたものが葛根(かっこん)として薬用に使われる。かつては葉が飼料として利用されたようだが、それもなく蔓が長く伸びて他物にからむので厄介な植物となっている。
- 12.キンミズヒキ[金水引]: 黄色い小花の房が長く伸びるので、タデ科のミズヒキとの対比でキンミズヒキ。花は美しいが、花後の実は細かなカギ状のトゲがたくさんあって衣服にくっつくので困る。
- 13.リンドウ[竜胆]: 山道でも見かけるが、田の法面などでも秋が深まった頃から咲き始める。競演の花々のフィナーレを飾るにふさわしい存在感。根茎を乾燥させたものが薬用の竜胆(リュウタン)。
- 14.センブリ[千振]: 日当たりと湿り気のある草地に生えるがすくない。高さ10~25cm。全草に苦味成分をもち、苦味健胃薬として有名。名は千回振り出しても(煎じても)なお苦味が出るということから。
- 15.ナンバンギセル[南蛮煙管]: 別名オモイグサ[思草]: 花は7~9月。葉緑素をもち、主にススキの根に寄生する。葉はなく、茎もほとんど地上に出ず花の柄が10cmほど伸びている。「道の辺の尾花が下の思ひ草今更々に何をか思はむ」(万葉集、作者未詳)。
- 16.ツルニンジン[蔓人參]: 別名ジイソブ[爺ソブ]。林内に生える多年生のつる植物で、名は太い根が朝鮮人參の根に似ることから。別名は信州の方言由来で「お爺さんのそばかす」の意。バアソブ[婆ソブ]というよく似た植物に対比して付けられたという。いずれも花の内側のまだら模様を老人の顔のそばかすに例えたもの。
- 17.ヤクシソウ[薬師草]: 山野に生え、よく枝分かれして大きな株になるので花の時期は見事。それまでに刈られてしまうことも多いが昆虫たちの晩秋の貴重な蜜源なので、できれば残してやりたい。名の由来は不明。

18.アキノノゲン[秋の野鬮菜]: 日当たりの良い草地や荒地に生える。高さが2mほどにもなり、そうなるのと花の美しさがわからなくなってしまう。

19.ヨメナ[嫁菜]: 道端や田のあぜなど、湿り気があって日当たりがよいところに普通。高さは50cm~1m。野菊の中でもなじみ深いもの。葉は濃い緑色。花が散った後の毛(正確には冠毛)はごく短く、花が完全に脱落した後はイガグリ頭のような。春の若葉は食用にされる。

20.ノコンギク[野紺菊]: これも山野でなじみ深い野菊。群れ咲くこともある。高さは50cm前後が多い。花の色は淡青紫色で濃淡の変異がある。ヨメナと紛らわしい場合もあるが、ノコンギクの葉や花は密に着くこと、開く前の花びら(正確には舌状花)の色が濃い紫色であること、花が完全に脱落した後は毛(正確には冠毛)の束があって筆のように見えること、などの違いがあり慣れると間違えることはない。

21.シラヤマギク[白山菊]: 高原や林縁に普通。1~1.5mと大きくなる。白い花びら(正確には舌状花)は不ぞろい。下部には柄のある心臟型の大きな葉がある。春の若芽は嫁菜に対して婿菜(むこな)とよばれ食用にされる。

22.アキノキリンソウ[秋の麒麟草]: 別名アワダチソウ[泡立草]。日当たりのよい山野に生える。高さ30~80cmほど。外来種のセイタカアワダチソウと同じ仲間だが、はるかに清楚な印象。

23.サワヒヨドリ[沢鞠]: 日当たりのよい湿原に生える。高さ40~80cmほどで茎は赤みを帯びることが多い。葉は柄がなく対生または輪生。茎の上部で分枝し、先端部に淡赤紫色まれに白色の細かい花が多数つく。糸のように出ているのはめしべの一部。

24.ヒヨドリバナ[鶉花]: 山野の日当たりのよい場所に生え、高さは1mを超えることもある。葉は短い柄があり対生する。花は白が多いがまれに淡赤紫色のものも。サワヒヨドリの花と同じような構造。茎は通常緑色で下の方からよく枝分かれする。

里山雑記帳

(2)きれいな花だけど…

写真の花を見られたことがあると思います。オオキンケイギク[大金鷄菊]という名の宿根草で、5月~7月頃道沿いや土手などに群生して鮮やかな黄色の花を咲かせます。北アメリカ原産のキク科の植物で、もともとは観賞用や緑化用として明治時代に導入されました。しかし広く野生化し繁殖力が強いので、日本の自然に重大な影響を及ぼす恐れがあるとされ、2006年に外来生物法に基づき特定外来生物に指定されました。栽培・移動・販売などが法により禁止されたのです。確かに強い植物で、刈り払ってもすぐに伸びてきます。このため増えてしまうと、在来のカワラナデシコ、オミナエシ、野菊類など、同じような環境を好む在来の植物が駆逐され姿を消してしまう可能性が高いのです。一斉に花を咲かせているオオキンケイギクは確かにきれいで、刈らずに残しているような場所も見かけます。しかし外来植物によって里山の自然や景観が変わってしまうのは好ましいことではありません。花に罪はないですが、やはり増えないように駆除することが必要でしょう。(T)



リーフレットその4 発刊にあたって

里山の生きものたちの姿を多くの人々に紹介し、そのような生きものたちが身近にいることの価値を感じていただきたいとの思いで、生きものたちの写真を集めたリーフレットシリーズの製作を行っています。今回は、「その4 秋の花」を製作しました。

春・夏・秋と分冊になっていますが、もちろん自然は切れ目なく移ろっていきます。どちらに入れるのがよいか迷うようなものも多くありましたが、当地での花の盛りの時期を考えて分けるようにしました。

秋に咲く花は、夏のそれと比べると数も少ないし、派手な色彩のものもヒガンバナぐらいしか思い浮かびません。でも、ひんやりとした空気感の中で見る花々は味わい深く、心に染みるようです。昔の人たちは、楽ではない日々の営みの中でもこれらの花々を愛し、そっと刈り残すようなことをしてきたのではないのだろうか。そのような気がします。

晩秋の天気の良い日には花々に多くの昆虫が来ています。冬を迎える前の大切な栄養源になっているようです。作物の受粉に活躍する虫たちのためにも、在来植物で邪魔にならないものは刈らずに残したいものです。

掲載の写真は岡山県久米郡美咲町旭地域（旧旭町）で撮影したものに限定しています（撮影場所の詳細は非公開とさせていただきます）。紹介できた植物はごく一部に限られていますし、内容的に不十分な点も多いと思います。どうぞご容赦ください。見ていただいた感想などをお寄せいただけるとありがたいです。（石原隆志）

旭の里山・生きもの写真集 その4 秋の花

2020年11月発行

発行責任者：石原隆志（岡山県自然保護推進員）、石原八東（同）

連絡先：hoonoki@mx32.tiki.ne.jp HP: <http://hoonoki-koubou.jp> 「岡山中北自然観察誌」

協力：岡山県自然保護センター、旭の自然を守る会

表紙写真：リンドウ（リンドウ科）2016.11.02 撮影

裏表紙写真：ヒガンバナ（ヒガンバナ科）2016.09.14 撮影

※このリーフレットは、公益信託タカラ・ハーモニストファンド令和2年度活動助成を受けて作成しました。

※植物の和名と分類は「山溪ハンディ図鑑1 増補改訂新版・野に咲く花」、「同2 増補改訂新版・山に咲く花」に従いました。

